
晴れのち転生

山寺獄寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れのち転生

【Nコード】

N6117Q

【作者名】

山寺獄寺

【あらすじ】

産まれた時から退屈と違和感を感じていた男はある日、神様に
出逢ってしまった。

『あなたには漂流してもらいます』

その一言から俺の人生は新たに始まった。

本日は転生なり

「……さて、どうしたもんか」

さてさて本当にどうしたもんか。何とか状況を把握しようと身を翻して辺りを一周。

数瞬の沈黙――

「何もない……」

部屋で寝てたはずなんだが――」

まるで某SF映画のワンシーンの様な白磁の地平線が広がっていた。いや、地平線という表現は正しくないか。この空間には地も天も無い。ただ、白に塗り尽くされたキャンパスを見てる気分だ。平面のような立体のような、そんな曖昧な境界が俺をジリジリと侵していく。少しずつ自分の意識がぼんやりとしていくのが分かる。

どうやらまずは意識をはっきりさせることから始めないといけないらしい。

その為にも、今に至るまでを思い出してみようか。

俺――■■■■を形作る核を一言で表すなら『退屈』だった。戯言遣いの言葉を借りるならく生まれた瞬間に、ああ生まれてくる世界を間違えた>というやつだ。何をやっても心の何処かに不満が首を擡げていた。

何かが違う――

あらゆる分野で才覚を示しながらも、決して満たされる事は無か

った。こういう言い方は良くないだろうが、俺は何でも出来てしまった。格闘技を習えば半年もしないうちに有段者と渡り合い、一年足らずで最上位に登り詰めた。勉強をすれば別段たる苦労もなく最高点を叩き出した。そんな俺を見て両親は素晴らしいと歓喜の涙を流し、俺は段々と自分の中に違和感を溜め込んでいった。

そんな生き方を何年も繰り返した所で気付いてしまった。俺のいるべき世界ではない、と。俺を満たしてくれる何かはこの世界には存在しないものだ。世界を形成する常識や理には適応されない異能。結局の所、俺の能力はそこから零れ落ちたモノの寄せ集めでしかないのだろう。とは言ったものの死んでしまいたいとは思わなかった。退屈は人を殺すというが、どうやら俺は人の形をしたナニ力だったらしい。

「平凡を愛せる、か……カカツ俺の中身は平和を願う英雄か、平和から逸脱しきった人外か？」

そんな風に思い至ったのはつい昨日のことだ。

それで今、俺は真つ白な空間に立ち尽くしている訳だ。立っているのに足元が覚束ない。頭が上で足が下、そんな当たり前の事すら信じられない。

「さてと本当にどうしたもんかなあ……」

本日二度目となる溜め息が口元から零れて消える。実際の所、余りに現実から乖離しすぎているせいでまともな案なんて出てくる訳が無いし、正常な思考回路を持っていたとしても対処の仕様など無

いのだが。

どれぐらい時間が経ったのか全く解らない。一瞬かもしれないし一日は優に経っているかもしれない。ジーンズのポケットに何故か入っていた携帯電話に一縷の望みを賭けたものの画面は真っ白に光るだけという悲しい現実を再確認させられた。携帯という文明の利器が使用できず、時を知るような要素が何一つない空間に閉じ込められている状況は、あくまで現代人たる俺の精神をガンガン削ってくれていた。こんな戯言が自然と口から漏れるほどに。

「ああ死んだのか、俺」

そして――

「まだ死んで“は”いませんが」

こんな言葉が耳に入ってしまうほどに。
幻聴が聞こえてしまうぐらい今の状況に参ってしまったている。

「まあそのうち何とかなるか――
それにしても暇だねえ……」

「聞いていますか？」

「このままノンビリしてりゃ、羽の生えた天使さんでもやって来て

――」

「やって来ませんが」

沈黙。そろそろ現実に向き合わないといけないか……とは言っても今の現状を考えれば『現実』なんて有って無いようなモノだが。

「んで？姿が見えないアンタが俺のお迎えかい？」

相手が見えない会話というものも中々に愉しいものだ。

「その問いには肯定しておきます——姿が見えないのも面倒なのでしばらくお待ちを」

そんな声が聞こえた途端、目の前には豪華な意匠を凝らした木製の扉が一つ。

「御入りください——」

「入って言われてもなあ——」

嫌な予感という奴だ。第六感と言ってもいい。開けた瞬間、俺は戻れない——そんな気がしてならない。

「別に入らなくても構いませんが。そのかわり、決してその空間から出ることは叶いません。無限の刻を狭間にて漂うのも一興かもしれません」

入るも地獄入らぬも地獄。けれど、こんな所にただ居続けられるほどイカしてはいない。

「進むは『打開』、留まるは『停滞』か……」

そう呟いて扉に手を掛ける。考えるまでも無い。待っているのは破滅かもしれないし地獄かもしれない。

されど――

「自ら突き進むことに意味が有るってな」

扉を押す腕からとてつもない重みを感じる。それは扉自体の重さか、それとも内から感じる重圧からか。

ゆっくりと開かれるにつれ、隙間から温かな光が差し込んでくる。

「鬼が出るか蛇が出るか……神様なんか出ても驚かねえがよ」

「――残念」

向こうから小さな笑い声とそんな言葉が聞こえると共に俺は意識を手放した。

…

…

…

「ようつこそいらっしやいました――」

そんな声に引き上げられる形で俺の意識は覚醒した。

「ここは……？」

どれだけの時間意識を飛ばしていたのかは不明だが、思っていたよりも不快感は無かった。辺りを見渡すと広々とした部屋の中と分かった。豪華な調度品は部屋を美しく飾り付け、中世貴族の応接間を思わせる雰囲気だった。その部屋の中心、テーブルを挟む形で対面する一对のソファの一つに俺は腰を下ろしていた。

「『世界と世界の狭間』『虚数空間』『次元の裂け目』——呼び方は何でも構いませんが。唯一、理解していただきたいのはココはあなたの知る世界（原理）から外れた世界（異常）だということだけです」

そんな事を告げながら目の前のソファに腰掛けた女性は柔らかな笑みを俺に向けてくる。シミ一つなく、縫い目の見えない白のワンピースに身を包んだ美女だ。肌も白く透き通っていて、雰囲気も合間ってこの世に存在しないものだと感じさせる。

ゆつくりとテーブルに置かれたカップを手にとると中に注がれた琥珀の液体を口に含み喉を潤す。その一挙手一投足が様になっていた。非の打ち所もなく凜とした立ち振る舞い。まるで――

「――まるで神様、ですか？」

「今時の神様は人の心を読むのが趣味かい？ カカツ」

多分、俺の口は三日月に持ち上がっていることだろう。

「そんな面白い趣味は持ち合わせていませんが。解りやすいとだけ」

「神様だったのは否定しないんだな」

「そう言うあなたこそ否定する気など無いように思われますが」

「カカツそんな物言い自体が「私は神だ」って言ってるようなモンだろうよ」

お互いに笑う。相手は柔らかでいて艶やかに、俺は明け透けに嗤う。

「変な問答は不要です。単刀直入に言えばあなたに異世界に漂流して頂きますが」

あえて『漂流』という言葉を使う目の前の自称神様。

「二次創作によく出るテンプレな転生とは違うのかよ」

俺の言葉に明らかに不機嫌そうに顔を歪める。

「あんな手違いで人を殺してしまうう一流の神モドキと同一視して欲しくはありませんが」

あまりに不機嫌そうだったため「悪い」と真面目に謝ると彼女は気を切り替えるためにもゴホンと咳ばらいした。

そこから俺が世界流しに遭う理由をつらつらと説明していくが長ったらしかったので割愛することにしよう。簡単に説明すれば。

曰く、そもそも俺という存在は別の世界に在るべき存在らしい。
このままでは今いる世界そのものが俺を排除するため、救済として
俺が本来いる『であるう』世界に送る。

「解っているはずですが。あなたという存在が既に外れてしまっ
ていることを——」

そんなことは生まれた時から知っているさ。

「ならばあなたに拒否権などありません。そうしなければ魂が消え
るだけです」

輪廻から零れ落ちた俺はこのままでは生まれ変わることもなく消
える、そう彼女は言う。

「あなたが元々いた世界は他の世界の影響を受けやすい世界です。
漫画や小説・アニメ等は本来別の世界を観測させる媒体として存在
しています」

「その中でもあなたは本来、危険のある世界に生きる生命です」

『魔法』 『超能力』 『戦争』 『神魔』 『滅亡』

平穩から外れた存在だと再確認させる。

「力カツ人外かよ——まあ、解りきってた事だったがよ」

「説明は以上になりますが。早速能力の方を決めて頂きますが——」

「能力だ？」

そんなモン貰えるとは思ってなかったんだがなあ。

「あくまであなたの肉体は一般人ですが。そのまま異世界に行けば動きます。サービスだとおもってもらえればいいです。

ただ、何でも可能という訳ではありませんが——」

「あん？」

「もう一度言いますがあくまで今回の漂流は“救済”です。ですので、あなたが本来持ちうる能力しか与えられませんが。解りやすくあなたの知りうる言葉を使えば、あなたの『起源』となるモノから決めることとなります」

「ここで型月か」

「続けますが——あなたの起源は『喚び出すモノ』。それに関する能力の付加しか出来ません」

「しばらく考えてください」

そう言って神様は姿を消した。

「喚び出すねえ——」

要は『召喚師』ってことか。そんな事を呟きながら思考の渦に身を委ねていく。

召喚、召喚――

ん？^{サモナー}召喚師か！！

「決めたぞ」

「ではお聴かせいただきましょう」

どこからともなく美しい声が響き渡る――

「ペルソナだ」

「あなたの知識にあるキタローとか番長が用いる能力ですか……
いろいろと能力に制限が掛かりますが？」

「ちなみにどんな制限だ？」

「まず使えるペルソナは6体まで。魔法等に制限はありませんが、ペルソナを体外に出すことが出来ませんが。あなたを送る予定である世界との差異が大きいからです」

魔法や技の支障が無いのであれば問題無いが……俺が送られる世界ねえ。

「『魔法先生ネギま！』という漫画を知っていますか？あの世界には魔法・気という概念があり、なおかつ妖怪・魔族・亜人と幅広い。最も能力に対するフォローがしやすい世界ですが」

俺の心を読んだのか簡潔な答えをくれた。

「『魔法先生ネギま』かあ……一通り読んだ気もするな。

ん？確か漫画の中に『精霊』を憑依させる奴がいたが、そういう形式をとれねえか？精霊じゃなくて『神魔』を憑依させるみたいないな」

不意に現れた神様は俺の言葉に考える様な仕草をして小さく頷いた。

「そういう形であれば問題ありません。むしろ余裕が増えましたが、当初の能力であれば一般的な魔法の使用は不可でしたが、今の形式であれば問題ありません」

「そりゃありがたい」

あくまで平坦に答えているつもりだが内に燦る気持ちを抑えられない。興ぶると言ってもいい。確かに俺は平穏を愛せる人間だ。

けれど――

けれど、ようやく手に入った切符を棄てられるほど達観出来ちゃいない。

「あなたは何を為すおつもりですか？あくまで興味本位ですが」

「力カツ何を為すか、か」

俺の内の思いを知っているからか、神様は少しばかり面白そうに口元を上げる。

「俺が俺で有るために生きる……それだけだ」

「やはりあなたは面白い。あなたのような方に逢ったのは300年振りですが」

彼女は本当に愉しそだった。

「能力については問題ありませんが。色々と変更点や決めなくてはなりませんので場所を変えましょう」

そう言つとパチンツと指を鳴らす。すると部屋にあつた調度品が一斉に消え失せ、再び真っ白な空間へと変化した。

「まず、ペルソナ召喚についてですが上限は六体までですが、装備出来るペルソナを選んでください」

「家にあるPS2のペルソナ3のデータから『タナトス』『スカアハ』『スルト』『キュベレ』、ペルソナ4から『オーデイン』『ヨシツネ』」

「即決ですが」

「元々能力決めたときに決めてたから問題ねえよ」

スキルで言えば

・タナトス（死神）

ブレイブザッパー

メギドラオン

ねえ死んでくれる？

ムドブースター

武具の心得

・スカアハ（女教皇）

万物流転

マハガルダイン

マハブフダイン

疾風ブースター

コンセントレイト

空間殺法

・スルト（魔術師）

ラゲナロク

マハラギダイン

火炎ブースター

火炎ハイブースター

デスバウンド

ハイパーカウンタ

・キュベレ（恋愛）

サマリカーム

メディアラハン

アムリタ

ニブルヘイム

刹那五月雨斬り

氷結ハイブースター

・オーディーン（皇帝）

真理の雷

マハジオダイン

電撃ブースター

電撃ハイブースター

イノセントアタック

チャージ

・ヨシツネ（塔）

八艘跳び

ブレイブザッパー

ゴッドハンド

チャージ

ヒートライザ

大剣の心得

かなりバランスが良い六体だろうよ。五属性の最大級スキルを持つペルソナが五体に物理系に特化させたヨシツネ。更に回復・補助のキュベレ。周回プレイ四回かつ、スキル継承を納得できる形になるまで繰り返す苦節。ここまでのアホみたいなプレイも愛の為せる技ということにしてほしい。

それを聞いて内容を吟味しているのか数瞬の間の後、神様は口を開いた。

「能力・スキルの確認しました。色々と変更しなければならない点もあります」

「あ？何か問題でも？」

「とりあえずの問題はハイパーカウンタですね。効果がアバウト過ぎるので適用できません」

言われてみれば確かにその通りかなあ。“高確率で”物理攻撃

を反射するなんてスキルは適用しようがない。そこから更に考えれば問題は浮き彫りだった。

一つは全体攻撃であるマハ系だ。まず全体の定義が曖昧だ。広域殲滅なのか個々に攻撃するのか。更にゲーム内では消費魔力は一定だが四体に対してと百体に対しては明らかに消費魔力がかわってくるだろう。

二つ目は回復系魔法。瀕死を復活させるサマリカームと全回復させるメディアラハンの違い。状態異常を治療するアムリタの治癒範囲。

「あなたの考えている通りです。更に付け加えるならラグナロク等の単体に特大ダメージを与える魔法についてですね。はっきりと言ってしまうえば『魔法先生ネギま!』の世界には単体にそこまでの威力を与える魔法は『おわる世界』などの広域殲滅魔法しかありません。そのため、世界の誤差が大きくなりますが」

要はきつちりとした基準があれば良い訳だ。

「なら最上級魔法スキルに関しては広域殲滅型にして、マハ系は敵それぞれに照準を合わせるような形に出来るか？」

「可能ですか」

「次に回復系だけだよ——ううむ、どうすっかなあ……」

ペルソナにおいてサマリカームは瀕死からの完全回復。極端な言い方しまえば死者蘇生に近い。ただ、おそらく死者蘇生は禁忌だろう。と言うことは必然的にスペックを落とさないといけないわけだが。「メディアラハンは怪我や病気の治療のみ。サマリカームは体力まで回復するって感じでどうだ?アムリタは呪いを含む魔法的

な要因での状態異常の治療で」

「妥当なところですね。ただ、一つ注意点がありますが」

ここまで考えて決めたにも関わらず、まだ問題点があるらしい。無意識にも溜息が零れる。めんどくさいの一言に尽きるだろう。

「スキルにある『』の心得』についてですが。率直に言いますがこのスキルは身につける意味がありませんが」

「意味がないってのは？」

「言葉にするのは難しいのですが……あくまで少しばかり扱い易くなる程度にしか効果がありませんが。あなたがその武器を扱えるかは慣れや鍛練によるのですよ」

確かにその通りだと思わされてしまった。どれだけ才能があるうと、それに胡座をかいて向上心を忘れれば、簡単に失われてしまうのだろう。

武とはたゆまぬ鍛練の結果として存在するもの——
そんな事を語っていた道場の師範の姿を思い出す。

「まあ、納得できるからいいや」

「大まかな部分は以上ですが。それでは最終確認します。
能力は『神霊憑依^{ベルソナ}』。使用可能なベルソナは六体。

魔法スキルに関しては魔力を、物理攻撃スキルは気を消費して発動します。それぞれ攻撃範囲に応じて消費量は増減します」

「ああ、問題ねえ——」

「——でしたらまずはこれをお渡ししておきましょう」

目の前の空間が突然光を発しながらうねっていく。その輝きはゆっくりと収束し始め、完全に治まるとそこには銀に煌めくハンドガンが現れた。

「“召喚機”か——」

「そうです。使い方は変わりませんので——」

浮かぶソレを手にとつてこめかみへと銃口を押し当てる。その引き金を引こうとして、自分の身体が全く動かない事に気が付いた。無意識に呼吸が荒くなり、心臓の鼓動が不愉快に感じるほどに早くなっていた。

怖い——

恐怖が俺を雁字搦めに縛り付けて自由を奪う。死ぬかもしれないという恐怖ではない。俺の日常が壊れてしまうことへの忌避感だった。

この引き金を引いてしまえば……日常が、平凡が一度終わってしまう。

掬い上げた砂が指の隙間から零れてなくなるように——

決めただろうが——

自分に言い聞かせる。

「前に進むってなッ!」

我は汝――

すうっと身体が軽くなった。ゆっくりと身体が創り変えられていくのが感じられた。

汝は我――

今、この瞬間――

我が身を贅とし――

――俺は生まれ変わる

我が心が求むる力を成せ——！！

引き金を引き絞る。

甲高い破裂音と共に、俺の頭の中で何かが弾け飛ぶ——

「『タナトス』——」

「——あなたはようやく新たな一步を踏み出しました。いかがですか？」

「これが——魔法、か」

身体の隅々を駆け巡る二つの温かな奔流に精神が高揚する。

「これが魔力と気か——熱いな」

身体の中を熱く燃え滾らせる魔力の流れ。

今までの人生で決して感じなかった力。けれど不思議と身近に感じる。

「最初に申し上げましたが――あなたは本来そういう存在だと」

「――なるほどね。なら自然と感じるのは当然か」

変質したのではなく元に戻ったと言った方が正しいのか。

再確認するように自分の手を見つめる。

「ん？」

ふと違和感を感じた。高揚しきった頭だったが思考そのものはまともだったらしい。自分の身体を確認してみると――

「恰好が変わったのか――？」

先程までのラフな恰好とは違い、今の俺は黒のロングコートにタイトな同色のズボン。更に右手に持っていた召喚機は細身のレイピアとなっていた。腰辺りをグルリと巡るように棺を模したファネルのような物体がフヨフヨと浮いていた。

要はペルソナ3に登場する『タナトス』に近い容姿に変化していた。

「――て、ことはだ……」

確信めいた予感を確かめべく手の空いている左手を顔に近づけてみる。

指先が鼻に触れる寸前に何か硬い物に阻まれた。

「カカツ、仮面か——」

「説明不足でしたが——精神は肉体に引つ張られるとは良く言いますが、肉体もまた精神（魂）に引かれますが。神霊クラスの魂であれば、そこまでの変化は必然です」

「今現在の共鳴率は80%程度。かなり高いレベルですが、一つだけ注意を——」

「——何だ？」

少し躊躇いがちな言葉尻が違和感となって頭に残る。

「気をつけて頂きたいのは、魂に『侵食』されすぎないように——ただ、ソレだけです。正直に言いますが80%という共鳴率は人間と神霊の共鳴率としては余りにも高い。高すぎると言っても過言ではありませんが——恐らくあなた自身の適性が高いのが理由でしょう」

——このまま共鳴が強くなれば人から完全に外れてしまうでしょう。

彼女はそう口にした。

本日は転生なり（後書き）

『夜の女神に愛を捧ぐ』を読んでいたって皆様ご無沙汰しております山寺獄寺です。

まずは謝罪を一つ

『夜の女神』の更新が止まっていて申し訳ありません。理由としては原作を余りに知らないからです。とりあえずアニメを見ようと思いますがもう暫く時間が掛かりそうです。

今回は純粹にネギまを書いていますので

ここまでお読みいただいた皆様に感謝を込めて

『本日は転生なり』スタートですッ！！

蛇足のような物体

「俺の名前は？」

「まだ決まってませんが」

今日は死の雨が降るでしょう(前書き)

バイト終わりにせこせこ投稿中

本日は死の雨が降るでしょう

「カカカツまあ気をつけておくとしようか」

特に恐怖を感じる訳でもない。そんな事より今は現状を把握する
としよう。

小さく息を吐いて呼吸を整えながら、身体の中に渦巻く魔力を練
り上げていく。ゆっくりと一つの形になるように――

「――『ねえ死んでくれる?』」

刹那――

練り上がった魔力が弾け、目の前の虚空にその姿を現した。

「カカツこりゃ壮観だねえ」

槍。槍。槍。槍。

目の前に浮かぶのは空を覆い尽くさん程の無数の槍だった。飾り
もなくただ、漆黒に染まったその一つ一つが禍禍しい魔力を纏い今
か今かと待機していた。

数の暴力であり必殺という二つの背反を持ち合わせた暴虐なる一
撃。その光景は狂おしくもあり、無骨な美しさを内包していた。

そんな光景に一瞬心を奪われながらもハッと我に返り、右腕を高
く掲げて声高々に叫ぶ。

「――墮ちろッ!!」

合わせて右腕を振り下ろせば呼応するかのように即死の槍は一斉に落下し始めた。

「本日は死の雨が降るでしょう――ってな」

黒い雨は地面へと突き立つとそのまま音もなく消えてしまった。

「魔法は問題なく使えるか――次は物理スキルか……」

右手に持った小剣を軽く前に構え腰を落として膝を曲げる。

ゆっくりと呼吸を整えながら浅く長く息を吐いていく。

『武術の基本は“呼吸”』なんて俺の知り合いは言っていたか。短距離走の選手は競技中に呼吸をしない。何故なら呼吸が運動を妨げるからだ。別に呼吸にエネルギーを使うからなんて馬鹿みたいな理由ではない。例えば重いものを持ち上げる時、息を止めないだろうか。

結論から言ってしまうえば『息を止める』のは瞬発的に力を使うには必須なことだ。

ところが武においては少し変わってくる。

時間が決められていない。いつ終わるかが解らないのだ。活人・殺人に違いはあれどスポーツ化し、時間を決め、技を決め、判定を決めてしまった武“道”には存在しない概念だろう。武術とは必然的に時間の概念がない。つまり長距離・短距離の区別が存在しない。そついった観点から長い研鑽の末行き着いたのは呼吸法だった。

空手の息吹のように武術はそれぞれ独自の呼吸法を考え出した。

その中の一つ——ある意味究極かもしれない呼吸。

『吸って吐くのは当たり前だよ、■くん。大事なのはね——呼吸を常に浅く広く続けることなんだ。分かるかい？昔の人は凄いやね。刀に生きた人達は知ってたんだ。力めば力むだけ酸素を使うってね。だから——』

——必要なのは脱力なんだよ。

ふと思い出した友人の顔。いつも明るくて、それでいて優しかった少女。第二次世界大戦以降、武術が武道へと追いやられていった最中、武術として隠れながらも残り続けた数少ない流派の跡取り娘。元気にやってんのかねえ——

余りに余計な事を考えすぎていて自分でも思わず苦笑が漏れてしまつ。そんな事を考えている余裕など今の俺には無いし必要ないだろう。

「なんて戯言」

小さく呟いて意識を再び落ち着かせる。今必要なのは程よい脱力——つまりは集中だ。

「——『空間殺法』」

スキルを唱えた途端、右腕が糸に操られるかのように意思とは無関係に剣戟を見舞う。けれど静から動への急加速に身体がついて来ない。無理矢理に放たれた剣閃は本来の威力を見せ付けることなく

虚空に消えた。

「くうツ——神の領域って奴か」

痛みに顔が歪み、小剣が右手から零れ落ちてしまった。するとコートや仮面が黒い霧になつて霧散してしまう。どうやら召喚機をもっていないければ憑依を維持できないようだ。

けれど、この痛みで分かったこともある。さっきの魔法とは違い、今回は俺の身体に負担が強い。

つまり、物理スキルの使用は『俺の肉体』を基にしている。ということとは、俺が鍛練していけば生身で行使する事が出来るのではないか。

何より物理スキルは他のペルソナに継承させやすいのも理由の一つだが。ペルソナの武器の有無に関わらず『斬撃』『貫通』『打撃』のスキルは継承できる。つまり物理スキルは使役者本人の素養に係してくるのだらう。

ならば、やることは一つだ。

「しばらく練習してえんだが、このままココ使って大丈夫か？」

とにかく身体を鍛え上げる。

「構いませんが——そこは時間の概念が無く、死というものもありませんか」

時間の概念が無いなら腹も減らない。何より無茶がきく。

もう一度召喚機をこめかみに構え引き金を引く。

我は汝――

汝は我――

「――『ヨシツネ』!」

さつきとは違いすんなりと身体に魔力が集まり鎧を作り、召喚機は日本刀へと変化する。腰には脇差しと鞘が一つ。

「始めるか――」

刀を鞘に戻し、右手をそつと柄に添える。

『剣はね、ただ振り回すだけじゃダメなんだ。力一杯力を込めれば良い訳でもないよ?』

基本は円――要するに“引く”イメージを持たなくちゃいけない。刃物はね、真つ直ぐ押し当てたつて斬れないんだよ。包丁も“引いて”斬るでしょ。最短で目標に向かわない。まあ、突きはかなり違うし言葉で説明するのは難しいから省くけどね。』

『居合の“居”には居るって意味と静まるって意味があるんだ。降り抜く瞬間まで体を居整え、気を沈め――一気に爆発させる。』

零から頂点まで――

居合は剣撃の中で“最速”なんて言われるけどさ。速度なら振り

下ろしの方が速いんだ。

加速度だよ。物理で習っただろ——ん？生物だったか……

簡単な説明しかないけどさ、加速度とは“スピードの上がり方”だよ。極端な話だけど止まってる二台の車があるとしてだ、一つは一分掛けて時速六十キロに達する車と十秒掛けて時速六十キロに達する車とどちらが速いかという話なんだよ。最終的にはどちらも同じ速度に到達するんだけど、過程として最高速に到達するスピードが違うんだ。これが加速度だよ。

居合はこの加速度が速いんだ。鞘を疾走らせる事で反動を利用して加速度を上げる』

居合いと呼ぶにはのんびりした速さで振ってみる。鞘を走る甲高い音が耳に心地良い。何度も何度も繰り返す。抜いては納め、振れば翻す。

一つ一つの動作の意味を理解していく。

こうすればもっと速くなる。

これは無駄な動きだと、刀が教えてくれているような気がする。

慣れてきた所で二撃、三撃と繋げていく。斬り上げ気味の居合から袈裟斬りへ、更にそこから手首を反して腰を断つ様な切り払い。

「カツ、カカカツ——」

思わず笑みが零れる。一つ一つの動きが新鮮で興味深く、それでいて面白い。

「ふんツ——を？」

一瞬、手首がブレてしまったのだが同時に刀も揺れ動いた。
もう一度、今度は意識して肩・肘・手首の関節をブレさせる。

「漣の太刀——とでも名付けるか？
カカツ本当に面白いな剣つてのはよお」

刀身は何重にも重なって見え、どれが本物が俺にも解らない。
すべてが本物で虚像——

「確か似たようなのが漫画であつたな——クレイモアだつたか？」

愉快的——

本当に幸せだ——

時間も忘れて没頭しつづける。

集中力がもつ限り——

ただただ人を殺す術を学んでいった。

そんな事を愉快的と感じる俺はやはり異常で狂っているのかもしれない。

「——カカツ……なんてな」

そんなのはとっくの昔に解っていたさ。

「やはり貴方は面白い」

幾許の時間が過ぎ、自分の中で剣が漸く形になってきた頃――神様の声が静寂していた空間に響き渡った。

「ん？」

「転生というのは想像の世界ではなく、実際に起きています。物語になる時点で新たな世界として認識されていますから」

二次創作だろうが形になったらそれは世界って事だろう。

「その通りですが。テンプレでチートになって原作破壊をしようという者もいます。そんな方々は決して自らを鍛えない。――必要が無いのですから。」

けれど貴方は違う。十分な力を得て、それで尚、自らを高めている。力に驕ることなく、しっかりと地に足を付けて……

何故ですか？自らのやっていることが人を殺す事だと理解した上で何故力を付けるのですか？

今まで刀を振り続けた期間は大体四十年程度——そこまでの理由が私には解りませんが」

簡単だ。

それに答えるのは簡単だ。

「力カツ死にたくないんだよ——正確には意味もなく死にたくないんだよ」

「どういう——」

「俺はよ——さっきまで諦めて生きてきた。どれだけの才能があつてもそれを生かしきれない。地獄だったさ。アンタが『救済』なんて言つてたがよ。全くもつてその通りだ——俺は『救われた』」

神様の言葉を遮つて言葉を続ける。

「だからこそ簡単に死ぬ訳にはいかない。俺は何のために生まれてきたのかすら知らない。

死ぬのが怖い訳じゃない。病に倒れて死んでも良い。恨まれて殺されても良い。戦い続けた結果野垂れ死んでも良い。

けどな、意味もなく死ぬのは御免だ。俺は俺の意思で満足して生きて——死にたい。その為なら今此処で刀を振り続けてんのも悪くない。

ただ——それだけだ」

「フフツ——アハハハ!!」

俺の言葉の何が面白かったのかは知らないが彼女は今までの優雅な印象をぶち壊す大きな笑い声ではしゃいでいる。

「アハハツ——ふう、最高ですね。よく解りました。本来はここまでする義理はありませんが楽しませて貰った礼ですが、貴方の願いを三つまで叶えましょう」

「力カツ豪勢だねえ——願いなあ……」

今思いつく限り二つ。

「三つ目は思い付いたらで構いませんが」

三つ目は保留で良い、か。本当に豪勢なこと——

「とりあえず一つ目は武器が欲しい」

召喚機で十分と思われるかもしれないが、案外欠陥品だと気づいていた。召喚機でペルソナを憑依させれば武器になる。逆に言ってしまうと憑依させなければ武器がない。無手で闘えない訳ではないが、あった方が良いのも事実だ。

「分かりました——しばらく目を閉じていただけますか？」

言われるがまま目を閉じると足元から魔力が巻き上がっているのを感じた。魔法陣でもあるのだろうか。

ん？魔法陣だあ！？

不審に思いながらも目を閉じつつづけていたのだが――

「では――いただきます」

そんな声とともに唇に柔らかな感触と共に花のような香りが鼻孔をくすぐる。

「ああ？」

咄嗟の事に呆然と声を上げて目を見開いてみれば、目の前にあるのは神様の顔だった。潤んだ透明感溢れた碧の瞳。心なしか頬が赤いようにも見える。

「な、何を――」

「仮契約ですが」

唇を離すと彼女はにっこり微笑んでカードを手渡す。

「アーティファクトか」

そこに描かれていたのは腕を組んで悠然と佇む俺の姿。そして俺の周りを浮かぶ四枚のカード。

カードには『アルカナの守護者』という名が書かれ、アーティファクトの欄には『選択の掟』の文字。

「アデアット」

喚び出してみるとカードと同じく四枚のカードが横一列に整列し

ていた。

それぞれ赤い剣・緑の草・青の杯・黄色の金貨の絵。

「どっかで見たぞ」

既視感に襲われた所で、四枚のカードはくるりと反転して背を向けると隣同士や間隔をあけてシャッフルしていく。

「シャッフルタイムか——」

シャッフルを繰り返していたカードがピタリと止まった。

「確かソードはこれだったな——っと」

左から二番目のカードを手に取りれば赤い剣のカード。どうやら正解だったらしい。

「武器顕現——『飛蝗』」

俺の詠唱に反応してカードが光り輝くと、一振りの日本刀が右手に納まっていた。

「なるほどね——こりゃ良いモン貰ったわ」

「魔力供給は出来ませんので御注意を——私から魔力を送れば、貴方が耐えられずに風船のように破裂する可能性がありますので」

中々不吉な事を言ってくれる。

「それでは二つ目の願いを——」

「鍛錬相手が欲しいんだが、何とかならねえか？」

今やれるのはあくまで素振りや能力の確認だけだ。せめて対人戦闘には慣れておきたい、というのが正直なところだ。

「分かりました——」

そう応えて何か呟くと何も無い空間に金属製の扉が現れた。

「ただいま呼び出します——」

ゆつくりと扉が開くと現れた二人の女性。

一人は肩まで伸びたウェーブの掛かった金髪。スカートタイプの黒っぽいスーツに身を包んだ大人びた女性だった。少し強めの化粧なせいか妖艶な雰囲気醸し出していた。

一方は首あたりで切り揃えられた金髪。服装は少し独特で青紫のエレベーターガールが着ていそうなワンピースに近い。その両腕には肘まである薄手の手袋。顔は意思をあまり感じさせない無表情だった。

「はじめまして——」

私、ベルベツトルームの住人『マーガレット』と申します。以後
お見知りおきを――
こちらは妹の」

「『エリザベス』でございます」

そんな挨拶と共にゲーム内におけるチート二人は頭を下げたのだ
った。

「は!?!」

本日は死の雨が降るでしょう（後書き）

アーティファクト解説

・『選択の掟』

シャッフルされた四枚のカードから一枚選んで効果を発動する。

？、ソード

ペルソナにおける武器を召喚する。召喚できる武器の種類としては小剣・大剣・槍・斧・籠手・弓のみ。コロマルやアイギスの用いるような特殊な武装は不可能。

？、ワンド

使用者の身体能力を五分間強化する。強化に対する魔力消費はない。

？、カップ

使用者及び仲間の体力回復。ただし魔力は回復せず、身体の欠損や状態異常には対応しない。

？、ペンタクルス（コイン）

ペルソナ内でのアイテムを召喚する。ただしジェム系の魔法を行って使えるアイテムは不可能。

こんな所でしょうか。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

太陽は怪しく輝く・前（前書き）

お待たせいたしました。最新話をお楽しみください。

太陽は怪しく輝く・前

テンパってしまったが神様から話を聞くと、あくまで彼女達は分身らしい。人形に人格・能力を写し込んだ分霊に近い存在とのこと。此処に彼女達が居ることによる問題もないようだ。新しく生命を創り出すという意味では目の前で微笑みを絶やさない女性が神であるのは納得できてしまうのだった。

「それでは訓練を続けていただいて構いませんが。訓練が終了し、三つ目の願いが決まればお呼びください」

ゆつたりと頭を下げ、三度彼女の姿は消えた。

「では始めましょう——」

有無を言わずの勢いで二人は構える。右手にはどこからともなく現れた広辞苑なみに分厚い一冊の本——ペルソナ全書が握られていた。

「流石に初っ端から二人はキツイだろ！？せめて一人だけにしてほしいんだがよ」

いくらなんでもチート二人を相手にするのは確実に死線をスキップで飛び越えてしまう。死なないのは解っているが進行形で精神がゴリゴリと音を立てて削れていく。

「仕方ありませんね——エリザベス、よろしくね」

「分かりました」

姉の言葉に当たり前の様に頷いて、エリザベスは一步前に出て来た。ゆったりとした構え。悠然と立っているように見えて、落ち着いていた。色のない表情も相まって、闘いの意思は感じられない。ただその碧眼は真っ直ぐ俺の方を向いて離れない。腹を括るか——ここまでくれば、俺には『闘う』という選択肢しかありはしない。女だから闘えないなんて甘ったるい性格はしていない。

「やるか——」

左足を少し引いて腰を落とす。膝を曲げ遊びを作り、左手は鞘に右手は柄を軽く握る。

意識を鋭く尖らせる。必要ない思考を排除して、ただ剣と一つになる。刀の届く空間すべてが俺の間合いだ。

「——いきます」

刹那——

空気を切り裂きながら鈍器と化したペルソナ全書を振り下ろしてきた。

反射的に居合で迎撃する。

「クッ——」

やはりというか当然の如くペルソナ全書と刀の煌めきは重なり合う。斬れないとは思っていた。悪魔を記した書。それは存在そのものが魔法と言っても過言ではない。

けれど、だ――

「――カカツ!! 弾かれるかよ」

拮抗したのは一瞬だった。軽々振るった一撃によって刀が弾かれ、たたらを踏む。体が吹き飛ばされかけるが何とか距離を取れた。けれど、そんな俺の様子を見て更に距離を詰める。

「様子見もなしかッ」

一発一発の重みに冷や汗が背を伝う。スピードは俺の方が上なため、何とか喰らい付けてはいるがじり貧だった。

あの細い体躯で異常なほどの力で速さで勝る俺を追い込んでくる。一撃一撃は防げているが衝撃が肉を震わせ骨を軋ませる。有効打は少ないもののじわじわとダメージを重ねていく。

そんな状況なのにも関わらず俺は笑っていた。今までやってきた努力を全て使えることに喜びを感じていた。

「カカツ嬉しいなあ――オイ」

「何でしょう――」

当たり前の様に返事が帰ってくるが、猛攻は止まらない。

「今のままじゃ勝負にならねえからよ――」

今まで受け止め真つ向から対抗していた攻撃を体裁きで躲す。

急に俺の動きが変わったことに警戒しながらも優位が変わらないと結論付けたのか、そのまま振り下ろしの一撃を放ってきた。上からくる一撃を刀の腹で流し、手首を返して振り下ろす。咄嗟に彼女も後方に跳んだ。

手応えは少ない。見れば腹の辺りの服が斜めに裂けていた。

そもそも力で勝負する必要はなかった。にもかかわらず力で対抗していたのは自分の力がどの程度なのか知りたかったからだ。今まで一人で鍛えていたせいで較べる基準がいまなかった。だから自分の技量がどの程度なのか全く把握できていなかった。そういう意味では十分だ。

左腰まで柄を落とし、切っ先をエリザベスの胸辺りに向ける。

ギア……上げるぞ？

「――刹那五月雨斬！！」

エリザベスに向け瞬速の突きを放つ。気で強化されたそれは間合いを超え、銃弾の様にエリザベスの体を貫かんとする。

力で負けるなら技で速さで勝負する。反撃することすら許さない。

「オラオラアアア」

更にスピードを上げて突きを放ち続ける。エリザベスも何とかペルソナ全書の表紙部分を平行に動かして最低限の動きでガードしているが、それでも反撃には移れない。

「『漣一式・雲流』くもながれ」

突きの合間にランダムに剣戟を翻す。

「なつ——!？」

横振りの一撃を受けようとした右の二の腕が横に朱の線が浮かぶ痛みと何が起こったのか分からないといった感じでエリザベスの顔が歪んでいた。

「何を——したのですか？」

不可解な現象に驚きを隠せない様子で尋ねてきた。エリザベスからはガードを通り抜けた様に感じるだろう。

「さてな——後二、三発喰らえば分かるんじゃないの」

動揺をわざわざ解消してやる必要もない。何とか仕掛けを見抜こうと待ちの姿勢を見せている今だからこそ攻めに転じることが出来る。そう考えて腰に差していた飛蝗の鞘を左手に持ち二刀流の様な形でぶらりと腕を下げる。あくまで自然体。

「『五月雨二式・双嵐』そういつん——」

一足飛びにエリザベスの間合いに飛び込む。当然ながら合わせるようにペルソナ全書を振り下ろしてくるが、鞘で彼女の肘を払い、関節を曲げさせる。それだけで簡単に力が逃げてしまう。あとは死に体だった。力が分散したせいで体が硬直している彼女の脇腹に蹴りを放った。

「カハッ——」

口から強制的に息が漏れる音がした。横に飛ばされた彼女の体は完全に俺の間合いだ。そこから両腕の得物を縦横無尽に駆け巡らせる。

ガードしようとするが動きは鈍い。

右からの切り払いに左からの薙ぎ払い。時には交互に、時には同時に腕を振るう。その度に両腕の関節をフルに動かして刀身をブレさせる。それだけで躲せるモノはその身に届き、防がれるモノはまるで透けるように叩き付けられた。

それでも彼女は倒れなかった。乱撃の合間を縫うように突き出された拳は正確に俺の鳩尾に吸い込まれた。

重く、鈍い重低音が響いた。

「グッ——ガハッゴポ、」

たった一撃。けれどその一撃は骨を砕き内臓をグチャグチャに痛め付けた。喉を逆流する感覚に我慢できずに血を吐き出す。

「斬撃中に腕の関節を無作為に動かして剣をブレさせる、それが連の正体ですね。」

ですが——そのせいで貴方の攻撃は軽い」

それは解っていた。実際彼女の体中には深い切り傷もあるものの重傷とまではいかない。

刀身をブレさせることでガード不能にする——それだけで判断すれば利点が多そうだが、実際は欠点だらけ。

剣をブレさせるといことは“刀の重心で当たらない”ことだ。野球のバットの芯と同じ様に刀にも一番力が掛かる部分が存在する。刀身をブレさせて狙いを外して攻撃するということは必然的に芯から外れてしまうのだ。結論から言ってしまうえば攻撃力が低い。

だからこそ俺は速さを求めた。それが『漣二式・双嵐』だ。圧倒的質量で攻撃する事に重きを置いた。

それに対して『漣一式・雲流』は相手に斬撃のタネを理解させない為の技だ。空間殺法や刹那五月雨斬の中に混ぜ込むことでありとあらゆるパターンを作る。“雲”の様に形無く“流れる”技という意味だ。

俺はさっきの『双嵐』で倒していなければならなかった。それが出来なかった以上、タネを自ら明かしてしまったようなものだ。なおかつ反撃を受けた。

「——決めきれなかったか……」

ダメージは少しずつ回復しているが、はっきり言ってマズイ状況だった。未だに体が上手く動かせない。

「貴方の剣技が必殺足りえない以上、お互い小手調べは辞めましょう」

そう言ってエリザベスは右手に構えたペルソナ全書に魔力を流す。呼応して全書のページがめくれだし、あるページで止まった。

「メギドラオン——」

マズイ。ヤバイ——

『メギドラオン』

本来の威力なら問題はそこまでない。しかしエリザベスの使う『メギドラオン』は非常にマズイ。ゲーム内での主人公のHPは最大で999なのに対してエリザベスの『メギドラオン』は固定ダメージで9999ダメージある。正に“必殺”の一撃だ。

防ぐとか躲すとかいった次元ではない。頭の中で目まぐるしく思考を廻すが出ては消えを繰り返す。

見上げる先には白く輝く太陽。込められた魔力量が多すぎるため莫大な熱量を放っているのか周囲の空間が陽炎に揺らめいていた。

「——堕ちなさい」

ゆっくりと小さな太陽が俺目掛け落ちてくる。

《吾を喚べ——》

その言葉は酷く透き通っていて、幻聴のようだった。

太陽は怪しく輝く・前（後書き）

・エリザベス

エリザベスの依頼の最後。モナド最下層にて待ち構えるチート。二回攻撃を繰り返し、主人公と同じ様に数種類のペルソナを繰り返す。パターンがあるため対処は可能だが、属性を無効化すると問答無用に『メギドラオン』で強制終了させる。

因みに依頼を完遂するには主人公『一人』で戦わなければならない。
い。

太陽は怪しく輝く・闇夜にて（前書き）

本編よりおまけの方が長い件について

太陽は怪しく輝く・闇夜にて

気付けば、何故か俺は今さっきまで立っていたであろう場所とはガラリと変わった所にいた。

さっきまでの場所を白と表すなら今は黒だ。ただ目の前には、ぼんやりとだが人型の空白が見えた。

「お前が俺を此処に喚んだのか——？」

《然り——》

頭に直接響いた声色は酷く透き通っていて冷たい。刃物の様な鋭さも感じた。

《何を望む》

「カカツお前が喚んだんだろ。ならお前が俺に何を求める？」

《——答えを》

「答え、か。最近の神様はホントにおしゃべりだねえ、カカツ」

《問おう、少年。》

『汝、何を為す者ぞ——』

俺の軽口に付き合う気もないのかただ重厚な言葉が脳裏に響く。

「ク、クカカカッ

カカカカカ——ッ——！」

《何が可笑的い——》

「カカカッ——いやいや、こりや笑うしかねえよ。こんなくだらねえ質問するためにこんな所に呼び出されたんだからなあ。アホらしいわ」

笑いが我慢できずにひとしきり笑い続けた。

《答えよ——！！》

「知らねえよ、んな事はよ」

怒りに震えた声に俺は簡潔に、そして素っ気なく答えた。

「メシ屋で料理注文する訳じゃねえんだからよ。世界跳んで何をするかなんて分かる訳がねえ」

先程までの怒気を一転させ白い影は俺の言葉に耳を傾けていた。

「正義の味方になりてえ訳じゃねえ、悪役を演じたい訳じゃねえ——ただ、『俺らしく生きたい』それだけだ」

結果、正義と讃えられるなら甘んじて正義を名乗ろう。悪と断じられるなら喜んで悪を為そう。

為したい思いがあるとするならば、俺が俺であつた——『織上^{オリガミ}七^ナ夜^{ナヤ}』がそこにあつた証を世界に刻みたい。

「だからよ——俺はお前“等”に応えられる言葉を持つちやいない。後は勝手に判断してくれや」

目を閉じて相手に身を委ね、静かに反応を待つ。

すると、何処からともなく笑い声が響いた。神様の様な上品なモノでも無く、明るい幼さすら感じる姦しい笑い声。

「キャハハッあたしは気に入ったよ？」

「我らを宿すに相應しい主だと思うが？」

重く、そして威圧感を感じる言葉。

「私も彼を認めましょう。彼の生きる姿勢は好ましく感じます」
ワタクシ

「……………承認」

「俺の命（炎）、貴様に預けよう——」

合わせて五つの言葉が俺の耳に届いた。ゆっくりと目を開ければ、俺を囲むように六柱の人影。

「認めるか？義経公」

目の前に最初から佇んでいた人影が面白いように動揺に揺れ動いた。

「何故——」

「俺はよお四十年ぐらい剣を振り槍を突き、身体を鍛え続けたけどよ。その合間に神様と話したりしてな、いろいろ解ったことがある。神様つてのはな、何処までいっても刹那主義だ。未来なんてありはしねえ」

時間という概念から外れた次元にいるからだろう。そんな場所に居続ける為には自らの時間（未来と過去）を切り捨てた存在。それが神という存在だと俺は思っている。俺がああ白い空間で刀を振っていた間、彼女はずっと俺を観察し続けていた。姿は見えなかったが、視線というか気配は感じ取れていた。時間という概念に縛られた存在にそんな事は出来ないだろう。四十年もの間じっと何かを見続ける。それは地獄のような苦痛だろう。

それを当然と熟すのは時間から外れているからだ。

時間から外れ成長も進化も衰退も退化もない神には『未来』という言葉を理解出来ない。

にも関わらず、目の前にいる影は『未来』で何をするか尋ねた。だったらそいつは神じゃない。けれど、さすがに神でないはずはないのだから答えは一つ。

人の身から神となった存在。源 義経。

「我は――」

「お前さんは後悔してんのかい、自分の生きた道（過去）を？カカツ俺に出来るのは後悔しない生き方をするだけだ」

義経公の言葉を遮って俺は笑った。

「そうであつた――」

我はそう望んで笑って逝つたのだ――

少年、汝に感謝を」

大切な何かを思い出して、義経公は俺に頭を下げた。すると、白い影だった姿が本来の形へと変える。六柱すべてが俺に向かって片膝をついて得物を捧げてきた。ある者は剣を、槍を、杖を、刀を両手で俺に向かって高々と――

「受け取ってください、我等が主よ」

真つすぐ俺を射抜く十二の瞳。そこには恐怖も動揺もなく、ただ歡喜の色だけが浮かび猛々しく燃えていた。

「カカカツ――ならばついて来い！！俺の前に立ち塞がる難敵を打ち砕き、俺の後ろを歩む者に安寧を与えるために」

総てを救えるなんて傲慢な理想なんてありはしない。ただ、自分にとって大切な者を守る為に闘い続けよう。善悪など関係なく、俺の周りが笑って居られるように。

捧げられた得物を全て受け取って叫ぶ。

「行くぞ——俺達が始まるために、そして最高の結末を手に入れる
ためにな——」

「「「「「御意」「」「」「」

おまけの様な草案

「ちよつとIS考えてみた編」

俺には家族と呼べる人がいない。正確には家族はいる。けど、その人を家族と呼ぶには遠すぎた。

俺が産まれて直ぐに両親は俺と姉を捨てて何処かへ消えた。別に顔も覚えてすらいらない両親について語る事はこれ以上存在しない。俺が少しずつ成長して物心ついた頃、世界にある革命が起きた。《インフィニットストラトス》——一般には略してISと言われる兵器。宇宙での運用を目標としたパワードスーツ。開発者は姉の友人。そして俺の幼馴染みの姉。社会の不適合者だった彼女——篠ノ^{しののたはね}之束はISという兵器を発明して世界を自分に適合させた。『凶

人』『天災』、そんな風にけなされていた彼女は天才の名を欲しいままにした。そんな現代において超越した科学技術であったISにも欠点があった。

『女性にしか扱えない』

その結果、世界は女尊男卑へと変調していく。

俺自身、そんなことはどうでもよかった。世界がどう変化しようと幼かった俺を中心にした小さな世界は変わらないと思っていたから。

ところが姉が人類最初のIS適合者となってガラリと音を立てて世界が壊れた。姉からすれば俺を養うためには仕方なかったのだろう。自らの才能を遺憾無く発揮して世界の頂点へと上り詰めていった。と同時に家族としての関係は凍えていった。

最初は俺も頑張ったのを覚えている。幼いながらも家事をこなし、姉の帰りを待った。時計の針がどれだけ時を刻もうと待ち続けた。待つて待つて待つて待つて、そうして俺は諦めた。

ISが俺を不幸にした。幼い俺がそんな結論に達したのは残酷なまでに簡単な事だった。

そして事件が起こる。

正直未だに語るには俺の決心が付かない。だから結果だけ言うでしょう。

俺は右目から光を失い、姉を『姉』と呼ばなくなった。

姉はそれから一年経ってISを乗るのを辞め、俺を追うのを辞めた。

「それでは行ってきます」

高校入学。普通なら期待と不安に胸を弾ませるイベント。ところが俺の中にあるのは暗雲立ち込めた絶望に胸は沈んでいた。

「行くか、一夏」

「はい、俺の不幸の螺旋を終わらせに」

短く刈り上げられた頭に紺色の仁平を来た男の声にしっかりと言葉を返した。

「何度も言っただが……お前があそこに行く理由は無いだぞ？」

「親父はホントに心配性だなあ。此处で終わらせなけりやいつまで逃げてりや良いか分からない。だったら真っ正面から終わらせてやるよ」

いつも親父が言ってんだろ？

「敵は真正面から打ち砕け」

二人揃って笑いあつた。

「まあお前の好きにしな。帰る家は此処だ——」

そう言つて風呂敷に入つた包みを投げ渡してきた。

「これは——」

「饞別だ」

開ければ羽織りだった。漆黒に染め上げられた上品な一品。その背には『桐生』の紋。

「さっきの話じゃないが、お前が望むなら一席空けておく」

打つて變わつて真剣な目付きの親父の雰囲気は刀身のように鋭い。

「今は正直分かんねえ……ただ桐生の名を使わせて欲しい」

深々と頭を下げ、親父に背を向ける。

「行つてこい、息子」

「遥姉さんによろしく、一馬の親父——」

背中越しに手を振つて、門に待機していた黒塗りの車に向かう。

少し肌寒い空の元、決意の証を肩に掛け、庭を突っ切る長い道を歩く。

「いつてらっしゃい、若ア!!」

道に沿って並ぶスーツ姿の男達は俺の歩みに合わせて頭を下ろす。

「親父を頼んだぞ」

「押ッ忍!!」

太陽は怪しく輝く・闇夜にて（後書き）

おまけは何となく他の作家さんの作品に影響を受けてプロローグ的なモノだけ書いてみました。

反響あれば続きを書いてみようかなと思います

太陽は怪しく輝く・後（前書き）

間違えて夜の女神の方にあげてたので訂正

太陽は怪しく輝く・後

暗闇からの帰還。あれだけの問答があつたにも関わらず全く時は進んでいない。天に輝く太陽は輝きを増しながら俺に向かって落ちて来る。絶体絶命の状況。けれど不安は微塵も無い。

後二メートル。

ゆっくりと召喚機を右手に持ちこめかみに当てた。

後一メートル。

今なら分かる。俺がこの力を手に入れた意味を。

我は汝――

《汝は我――》

我が魂は――

《汝の意思を貫く槍なり――！！》

目の前にある太陽。溢れる魔力が灼熱となって俺の肌をチリチリと焦がす。

俺は目を閉じて引き金を“二度”引いた。

「やりましたか——？」

目標に突撃して破裂した魔力の塊。衝撃の余波でスカートの裾が揺れ、髪が後ろにたなびく。白煙を上げ未だに炎の様に空間が歪んでいる光景に目を細める。

煙のせいで生きているか確認できない以上、安心出来ない。確かにアレが直撃する寸前、彼は召喚機を使っていた。

けれど——

自分の持つ最大の魔法だ、致命傷は避けられまい。そんな思いが頭をちらつく。何をしようとも所詮悪足掻きに過ぎないと。

ゆっくりと白煙が収まり、空間の歪みも整っていく。確認を込めて構えを解かずに少しずつ近寄った。

「いない……！？」

「気を抜くなよ——こっからフィナーレに一直線だからよおおお！」

すぐ後ろから聞こえた声。振り返ろうとした瞬間脇腹に重い衝撃を受け、エリザベスは吹き飛ばされた。

受け身も取れずゴロゴロ転がる。体勢を整え立ち上がると既に目の前に男の姿があった。

鎧兜に身を包んだその姿はエリザベスの知るヨシツネの姿だった。

しかし一点だけ異質なモノがあった。ヨシツネを召喚した男の顔には左半分にタナトスの仮面を半分に切ったような仮面が付けられ右半分には炎を象ったような黒い入れ墨の様なモノが広がっていた。今もそれは肌の上を揺らめき、姿を変えていた。

「何ですか……その姿は」

「カカカツ、気づいちまったんだよ。俺はあくまで召喚師——だったら俺自身が鍛えるべきは力じゃねえ。俺に必要なのは神を降ろすのに耐えうる魂だってな……」

示すは魂（心）。

「四十年鍛え続けても俺が扱えなかった技が二つあってな。カカツ——まあ、今から見せてやるから期待してろ」

未だに起き上がることの出来ないエリザベスの脇腹につま先を入れ宙に蹴り上げる。

「——八艘跳び」

蹴り上げた状態そのままに飛び上がりグルリと身体を一回転させてオーバーヘッドの要領でつま先を叩き込む。とつさに右腕で蹴りを防ぐが踏ん張りの効かない宙に浮かんでいるため勢いは殺せない。上に飛んでいたベクトルは打ち消され地面に勢いよく堕ちていく。

刹那、男の姿が消え再び下から鈍い痛みが走る。

「キヤアアツ——」

「まだまだ行くぜ？」

男の姿が消えては死角から現れエリザベスへ蹴りを放つ。前蹴り、ミドル、膝蹴り、踵。

「ラストオ！！」

ずっと宙に居たエリザベスに止めとばかりに踵を叩き込み地面へと叩き付けた。

「八艘跳びの逸話は知ってるか？」

エリザベスの堕ちた地点のすぐそばに降り立つと、その声を掛けた。

「うう……」

力無く呻くエリザベス。その様子には俺は新たに召喚機の引き金を引いた。鎧兜だった姿は一転し紫の体軀に白の紋様が紐のように巻き付きこめかみから二本の角が頭を沿うように後ろに流れている。髪は漆黒に染まり後ろで一纏まりに括られている。男らしい線が消え、みずみずしい女性へと姿を変えた。その両腕には一对の小太刀。その柄には山羊の頭骨をもした装飾が施されていた。一糸纏わぬその姿を隠すように鉄の輪が三つ身体を巡っていた。唯一女性的な雰囲気や砕くようにヨシツネの時と同様にタナトスの仮面が顔の左側に存在していた。

「キャハハッ！！八艘跳びはね、源平最大の戦『壇之浦の戦い』で平家方の猛将・能登守のりつね教経の猛攻を源義経が八艘もの船の間を跳んで避けたっていう伝説なんだよ？」

そう言うキュベレは楽しそうに笑みを浮かべる。

元々、逸話から鑑みるに『八艘跳び』というスキルは攻撃用というより移動用、もしくは身体強化のスキルだ。瞬動に近いが瞬動は瞬間的な移動術なのに対して八艘跳びはある程度長期的に使用できる上に機動も自由自在とかなり使い勝手が良い。

「ま、せつかく喚び出してもらったけど……まずはお仕事お仕事つと」

そう楽しそうに呟くと、エリザベスのそばに座り込んで両腕を翳す。

「メディアアラハン——」

手の平から暖かな光が漏れエリザベスの傷を癒していく。切り傷も、痛々しい打撲の跡も色が薄くなっていき暫く経てば完全に傷は塞がった。

「これにてお仕事終了つと！——ん〜やっぱり身体があると新鮮だねッこのまま居たい気分」

《良いからさつさと戻れや》

「え〜」

いやいやと頭を振るキュベレ。だからこいつを喚びたくなかったんだ。キュベレとスカアハ。この二体は他の連中とは違う。女性なのだ。

流石に俺が俺のまま女性になるのは抵抗があった。そのせいかも知れないがこの二体を召喚する際に精神が入れ替わる様になってしまった。特にキュベレはそれが顕著に現れる。

《力カツ、まあ保険はある。タナトス》

《——了解。解除》

「ああ〜ヒドイ!〜!けど一つ言っとくけど——」

何か言いかけたタイミングで元の姿へと戻った。

「力カツまあ、俺、の?」

不意に視界が歪んだ。グニヤリと歪む視界に合わせる様に俺の身体もふらつき始めた。

「……………ああ?」

《二重召喚に八艘跳び。メディアアラハンまで使ったんだよ?いくらなんでも身体が限界だって》

そう言うことは早く言え。

「悪……………い。ちっ、と休む。マーガレット、エリザベ……………スの事、頼むわ」

薄れ逝く意識の中、駆け寄って来るマーガレットに向けて何とか呟く。

「畏まりました、我が主」

そんな言葉が聞こえた気がした。

おまけ？ifセキレイ編

その男は突然現れた。

「歌声に誘われて来てみりゃよ——何だ？修羅場か。モテモテだな少年」

右半身に奔る漆黒の入れ墨と顔の左側にある死神のような仮面が目を引き男だ。鉄橋の上にある鉄骨に佇んでいた男は愉快そうに笑っていた。

「ひんむかれて倒れてる女に、傷だらけの男女。カカカツ良いねえ、昼ドラかなんかか？」

「主、そんな事を言っている場合ではないかと」

何処からともかく現れた二人の女性は男のすぐそばに立ち、やりわりと男の戯言を否定した。

「仕方ねえ——気分じゃねえが割って入るか。マーガレットとエリ

ザベスは怪我人の保護な。俺は暴れてる馬鹿を何とかするわ」

「お任せを——！！」

「あなた達は——」

少年が不安そうに尋ねる。

「マーガレットと申します。以後御見知りおきを」

スカートの裾を翻して丁寧にお辞儀をする姿は余りにも場違いで夢の中にいるような勘違いすらさせる。

「はあ——ってそうじゃなくてッ！！ここは危ないから逃げて下さい」

マーガレットと名乗った女性はそんな少年の言葉に一瞬キョトンとして、クスリと笑みを浮かべた。

「優しい方ですね、こんな状況で他人の心配とは……」

「ですが」と彼女は続けた。こんな状況“ごとき”で逃げるのは早計だと。

ニッコリと笑みを向ける彼女を見て、何故か不思議と安心できた。

「カカカツ喧嘩中に悪いがよ——とりあえず止めさせて貰うぜ?」

二人の女性が向かい合う場所にひらひらと手を振ってやって来た男。

「汝は何者じゃ!？」

「通りすがりのお兄さんだ。それよりあっちの少年は知り合いか？ちつとマズイ状況だけど」

向こうを見れば倒れた女性を抱き上げ涙を流す少年の姿が見えた。女性の背に浮かんでいた小鳥の様な紋が薄くなって消えた。

「月海い……結ちゃんが——」

「鵲鴿紋が……」

それに気付いて愕然と立ち尽くす月海。

「やーっと止まったの？ホンっとウザかったー、そいつ。」

ま、ソコソコ闘れたコトだけはホメてあげるッ」

見下したようにその光景を眺めていた漆黒の羽織りにスパッツを履いた少女は嗤っていた。

「……汝え……」

怒りにワナワナ奮える月海。辺りに在った水が怒りに応える様に渦を巻く。

「よくも吾が友を！！
——赦さぬ！！」

巨大な水柱が立ち上る。

「カカカツまあ落ち着けよ」

今にも襲いかからんとする漆黒のドレスの少女に声を掛けた。

「汝は黙っておれっ！！」

問答無用とばかりに放たれた水の矢を無造作に掴む。

「なあっ！？」

「敵討ちつてのも分かるが今はあの少年の元にいつて支えてやれ。
コイツは俺が足止めしてやるからよ」

ハッと我に帰り俺と少年を見比べると、バツと翻る。突っ込むべきか、さっきからパンツが見えっぱなしだ。

「礼は言わんぞ」

そう言い残して少年の元に駆け出した。その姿を見て俺は笑う。

「さてと、それじゃ俺が揉んでやつからかかってきなよ、お嬢ちゃん」

構えもなく余裕の表情で手招きする。

「ブツ潰す!!」

怒りに青筋を浮かべ俺に向かって駆け寄ると顔面に向かって拳を放つ。

「カカツ残念つてな」

轟音と共に突き進む拳を手の平で掴む。そこらか身体をずらして肘を脇腹に打ち込む。

「ガッ——」

「まだまだ行くぜ?」

更に叩き込んでいた肘を返して頭を掴んで鼻っ柱に膝を叩き込んだ。

パッと手を離すとたたらを踏んで鼻を押さえながら二三歩下がる。

「アンタ何者? Noは?」

「番号なんかねえよ。俺は俺、たった一つのオンリー1つてね」

軽く言つと驚きと怒りに顔を染め上げる。

「セキレイじゃないくせにアタシの攻撃受け止めて反撃? アンタ人間!?」

「力力カツ安心しろよ。人間やめてる自覚はあつからよ」

俺の方から仕掛けようとした刹那、後方から力の奔流が溢れるのを感じた。

戦闘中にも関わらず振り返ると力尽きていた女性の身体から魔力とも気とも違うエネルギーが立ち上っていた。

「何だ？」

神霊を降ろす俺には分かる。確かにさっきまで彼女の身体から魂の反応が薄れていた。けれど今は違う。別のところから別の魂を持つてきているような感覚。

その女性の閉じられていた瞳がカツと見開く。

「愛ですっ！！」

「は？」

力強く立ち上がりこちらを見て、彼女は叫ぶ。

「愛を阻むものあらばっ “No.08” 『縁の鶺鴒』、この結女がお相手致しましょう！！」

とりあえず言っておこう。

「下着姿で何でそんなに自信満々なんだよ」

太陽は怪しく輝く・後（後書き）

いろいろやらかしてた（　　）。

簡素な解説

『八艘跳び』

ペルソナ4でヨシツネの 用いる物理攻撃スキル。《敵全体に小ダメージを8回与える》というものだが単純に八艘と8回を合わせただけだったりする。二周目以降、序盤のボス戦ならチャージ＋八艘跳びの2ターンで終わるチートスキルである。

本作では逸話に沿って攻撃スキルではなく身体強化スキルに変更。瞬動の上位スキルだけに使い勝手は良いが燃費が悪い。主に下半身を強化するため攻撃時は蹴りしか使っていない。

別れるときは涙雨（前書き）

こっちの投稿は久しぶりです。こっちのほつもネタが纏まってきたので定期的にあげていく予定です。

別れのときは涙雨

「ん、んんうゝ……んあ？」

ここは、どこだ。見えるのは染み一つない白磁のような天井。高い天井には程よく装飾の施されたシャンデリア。シャンデリアなんてものがあれば、それだけで堅苦しい感じを受けてしまうものだが、そういった感覚は全くと言っていいほどなかった。視界から見て取れるのは、俺がどこかの部屋に寝かされているということだけだ。神様と話した部屋のような相手を威圧する豪華さはなく、華麗の中に調和があつて、どことなく落ち着ける。とは言え、そろそろここがどこなのかはつきりさせたい。そう考えて上体を起こそうとしたところで、身体のいたる所から激痛が奔り、くぐもつた悲鳴が漏れた。

「ガッ、ぐううう」

持ち上がりかけた首から力が抜けて再び俺の頭は柔らかいモノに包まれた。感触からいえば枕だろうか。そう考えて自分がどこに寝ているのかを確認するべく視線だけを動かすと、案の定ベッドの上だった。全くと言っていいほど体の自由が利かない。何十年単位で研鑽を重ねてきたにも関わらず、たった一回の実戦というものは、俺の肉体的にも精神的にも深刻な影響を与えていた。

「目が覚めましたか、主」

何かを開くような音と共にそんな声が聞こえてきた。そつちに視線を向けようとしたが、どうやら見えない位置に扉があつたらしい。そこから足音が何度か聴こえてようやく声の主が視界に入った。

「マーガレットか——」

俺と視線が合うと彼女は顔を小さく綻ばせて手に持っていたお盆を近くにあつたテーブルへと載せた。透明な液体の入った涼しげなグラス。置いた際の振動でか、水面はゆらゆらと揺れていた。

「お水をご用意いたしました。起きられますか、主」

水という言葉に反応してか喉が急激に渴いてきた。思った以上に身体の疲労は激しいようだ。

「ふつ、ぐううう……」

腹筋に力を込め、肘を立てて身体を起こそうとするが、なんとか首が起きる程度にしか上がらない。更に鈍痛が身体に襲い来る。

「悪い、ここ、までしか上がんねえ」

たったこれだけの動作なのに汗が滲んで、呼吸が荒くなる。

「分かりました」

そう言つて彼女は俺の首と腰辺りを支えるとゆったりとしたスピードで身体を持ち上げてくれた。おかげでなんとか上体が起き上がった。

「ありがとな——んで、ここは何処だよ」

彼女に感謝を告げた上で辺りを見回してみたが、どこかの部屋とい

う情報以外分かったことがない。

「彼女に頼んで家を一軒作っていただきました。ここはその一室です」

マーガレットのいう“彼女”は神様のことだろう。そう考えると、わざわざ俺を休ませるただけに家を一軒作ったのだから豪勢な話だ。

「主、とりあえずこちらを」

そんな思考を知ってか、彼女はグラスをこちらに差し出してきた。それを右手で何とか受け取って口に持っていき中身を流す。スツと喉を通っていく冷たい感触がどこか懐かしい。グラスの半分程度を飲み干したところで、何とか落ち着いたので彼女にグラスを返した。

「どれぐらい俺は寝てたんだ？」

気になる点はいくつかあるが、とりあえずそんな質問をした。

「そうですね、約三日といったところでしょうか」

思った以上に長い間、意識がなかったらしい。そう考えれば今の俺の状況は納得できなくもない。

まあ、これに関しては考えても仕方ない。そう結論付けて次の質問を投げかけた。

「じゃあ次な。何で俺のことを主なんて呼ぶよ？」

これが一番疑問だったりする。気を失う寸前の会話から今まで、目

の前のマーガレットは俺のことをずっと主と呼び続けていた。

「主は主ですが」

返ってきたのはそんな見当違いな答えだった。いかにも当然とばかりの顔をしてそんなことを言う彼女。

「いや、そうじゃなくて俺を主と呼ぶ理由を知りたいんだよ」

彼女は一瞬キョトンとして、それから小さく笑んだ。

「私と妹は貴方様のお手合わせの相手をするために生み出されました。貴方様が、この空間からお出になられて新たな生を謳歌されるまでの仮初の命でございます。ならば私たちは最大限の手助けをさせてただけでございます。ですからこの空間にいる間だけでも、私たちの生がある限りは貴方様を主とさせていただきますたく思います」

深々と頭を下げる彼女の顔は見えない。しかし、そんな姿は酷く弱々しくて儚く映った。チクリ、と小さな針が心臓に刺さったような痛みが走る。

俺には何も出来ないのだろうか。

……

……

そんなことがあってから更に数年の月日が流れた。正確には月日が流れたらしい、が正しいのだろう。未だにこの空間での時間経過は良く分からないが、たまにやってくる神様が年月を教えてくれているのでなんとかなっているのが現状だ。

あの時から彼女達との関係はほとんど変化していない。変化があるとなれば、俺が眠っていた家が俺と彼女達の住処として残っていること、そして彼女達が食事の世話をしてくれているという点だけだ。本来なら、食事も睡眠も必要ないのだが、彼女達曰く「ここで食事を取っておかないと、新しい世界での食事に慣れるのに時間が掛かるでしょう」とのことだ。確かに、水を久しぶりに飲んだときに感じた懐かしさもそういうところからきているのかもしれない。

おかげで、俺は着々と新しい世界への準備を行っているのだから感謝しなければならぬだろう。

そして、今日がこの空間での最終日となっている。その最終試験といっても過言ではないが、俺とエリザベスは初めて会ったときと同じように相対していた。

「参ります——！！」

あの時と同じように突っ込んでくる彼女。右手に持った分厚い全書を振り下ろす姿をしつかりと見つめながら、俺も手にしていた日本刀を跳ね上げる。甲高い音を響かせてぶつかり合った二つの武器は以前のように力に負けるようなことはなく彼女の体勢を崩すことに成功した。そのまま俺は彼女の懷に飛び込みながら召喚器を右足に括られたホルスターから取り出し流れるようにこめかみにあて引き金を引く。

「行くぜツ、『ゴツドハンド』!!」

姿が変化したことなど確認するまでもなく俺はそのまま持っていた日本刀を手放し拳を握る。右腕に集まる力の奔流を感じながらエリザベスの鳩尾目指して解き放った。

「させません!!」

神の一撃がエリザベスに直撃する寸前、離れていたマーガレットが俺とエリザベスの間に入って、一撃を彼女の持つペルソナ全書で防いだ。しかし、あくまで防いただけで衝撃は殺しきれない。マーガレット自身無理矢理間に入っていたので体勢が悪く、受けきれずに二人の身体は纏まって吹き飛ばされる。

その姿を確認した上で、俺は新たに引き金を二度引く。
呼び出すのは――

「タナトスツ!! スルトオオオ!!」

先程まで身に着けていた鎧が紅蓮の炎に燃え尽くされ、炎が消えると漆黒のズボンへと姿を変えた。体中に焰を模した刺青が現われ、身体の表面を大蛇のようにうねった。そして俺の顔を覆い尽くす死神の仮面。そんな変化に合わせて魔力が俺の身体からメラメラと立ち昇り、俺の姿を霞ませていた。その仮面に触れながら俺は詠唱する。

「『ねえ、死んでくれる?』――」

溢れる魔力が無数の槍を生み出し天を黒く染め上げた。俺は右手に持つ炎巻き上がる剣を天に突き上げ、一気に振り下ろした。
レヴァーティン

「墮ちろ！！彼の魂を喰らい尽くせ」

合図に合わせて獲物目掛けて突き墮ちる槍の雨は視界を黒の筋で覆いつくし、大地を蹂躪する。彼女達がいた空間は衝撃で揺らぎながら白煙を上げていた。

油断なく白煙舞う辺りを睨み付ける。

「クカカツこんなモンじゃねえだろ」

自然と漏れた呟き。

刹那――

白煙を引き裂いてマーガレットが上体を倒したまま突っ込んできた。蒼いスーツのあちこちに黒いシミを作っている姿を見るに完全には避け切れなかったらしい。痛みに顔をしかめながらも動きは全く衰えない。そのまま俺の目の前数メートル辺りまで駆け込みながらペルソナ全書を振り上げた。

「デスバウンド！！」

地面に向けてペルソナ全書を叩き付けた。轟音を響かせて赤に染まった衝撃波が彼女を中心に広がり襲い掛かる。

チツと舌打ちして俺は飛び上がった。その波をかわす。その上体から虚空瞬動で彼女の背後をとった。

「とりあえず、デメエは寝とけや」

そのまま炎剣を彼女のわき腹に突き入れようとした。しかし、彼女はにやりと笑って

「さてエリザベスは何処にいるでしょう？」

そんなことを呟いた。

カツと目を見開いて白煙の上がっていた場所を見たがエリザベスの姿はそこにはなかった。

「お返しでございます」

警告・背後

タナトスの警告に俺がとつさに出来たのは気で身体をガードするの
が限界だった。背中に引き裂かんばかりの激痛が走り、身体が宙を
舞って吹き飛ばされた。

「ぐこツ、ぐう——」

宙で体勢を立て直して上手く着地できたものの痛みで膝を突き、衝
撃で更に数メートル引きずられる。

「油断大敵、でございます」

満足げに小さく笑むエリザベスの表情を憎憎しげに睨みながら俺は
息を整えた。しかし、呼吸のたびに背中を襲う鈍痛のせいで俺は顔
を歪ませた。

「チイツまだまだだ」

身体はまだ動く。とにかく二人の連携を防いで、その上で一方を一
撃でしとめる。

並んでいる二人のと真ん中に瞬動で一気に接近して炎剣を翻す。

「真・漣一式『炎剣・雲流』——」

斬撃を放ちながらも関節を動かして斬線に幻を生み出し、更に燃え立つ炎剣の熱が塵気楼を発生させて、幻の数を更に増加させる。結果としてそこに生まれるのは斬撃の嵐。彼女達は必死にかわしているが激しく燃え上がる炎に炙られ、チリチリと皮膚を焼かれていく。剣戟を繰り出しながら俺は呪文を紡いでいく。

「原初の炎よ——」

全てを灰と化す浄化の火よ——」

「コンセントレイト!?!」

彼女達の表情は驚きに歪みマーガレットは距離をとろうとバックステップし、エリザベスは詠唱を中断させようと攻めに転じようと剣戟の合間を縫う。

「汝、再生を司りし浄炎の徒にして破壊の僕なり——
クカカツ遅えよ」

俺はタイミングを見計らって後ろに飛び上がり炎剣を彼女達の中心に投げつけた。炎剣は地面に突き刺さり身にまとう炎を更に強める。

「神戦ラグナロクの浄炎——!!」

炎剣の炎が破裂し、中から莫大な熱量と衝撃を生み出しながら爆発した。

余波が俺の頬を撫で、髪を靡なびかせた。

そのまま俺は地面に着地して彼女達の姿を窺う。

「く、うううう」

爆発が収まると二人の姿が見えた。マーガレットは何メートルも先まで吹き飛ばされ地面に力なく倒れ、微動だにしない、一方のエリザベスはなんとか立っていられるだけ、といった状況だった。ワンピースはボロボロに裂けていてチラチラと純白の下着が覗く。更に右腕は肘から先が完全に炭化してしまったのは黒くひしゃげてしまっていた。身体のおちこちにも火傷して赤く腫れ上がっていた。

「ここまでにしとくか——」

俺は新たに引き金を引いてスルトの代わりにキュベレを再召喚した。身体が完全に少女のものに変化して手には二振りの双剣。その瞬間に意識が切り替わった。

「はいはい、それじゃ治療するからねえっと——」

ふわふわと浮かびながらキュベレはエリザベスの下に向かうと剣を掲げた。

「メディアアラハン——」

掲げた剣から暖かな光が溢れ、彼女達の元に向かうと、まるで逆再生のように傷が治っていく。炭化していた腕も気付けば元の白い腕にと変わっていた。

「キャハハッそれにしてもなかなかセクシーな格好かも。これならご主人も大満足かなッ」

彼女達の姿は傷は全て癒えていたものの、服の損傷はなくなっていなかった。先程までは傷のせいで痛々しかったただけだったが、今はボロ切れを身に纏った露出狂となっていた。

「え？んんうゝゝゝ！？」

キュベレの言葉に、ようやく自分の格好に気付いたのか彼女は真っ赤になって足早に屋敷の方に走っていった。ここ何年かで初めて見る姿だったので俺としても新鮮だった。

「可愛いねッ！！んゝ、それにしてもどうしてご主人はこんな時にしかアタシを喚び出してくれないかなあ？」

さっきまでの無邪気な表情は何処に行ったのかと問い詰めたくなるようなジト目だった。とは言え俺は意識が完全にキュベレの内側に隠れている状態なので自分の胸辺りを睨んでいるような格好になって少しばかり間抜けな姿だったが。

お前を召喚すると面倒なんだよ。全裸にはなるわ、性格変わるわ。身体貸すこっちの身にもなりやがれ

「えー、でもでもスカアハ姉さんもあんまり喚ばないじゃん！！姉さんも寂しがつてるんじゃない！？」

確かに、力になれずに申し訳なく思っではいますが——仕方ないことでしょう

少し寂しげな口調のスカアハの声が脳に響いてきた。確かに俺が嫌がって呼ばないことに申し訳なさが募る。

分かった。出来るだけ召喚してやる。その代わりキュベレは召喚したときに何かしらの服着るようにしてくれや

俺のギリギリの妥協点だった。ソレが分かっているからかキュベレはしばらく唸って、そして頷いた。

「分かった。じゃあ今度からちゃんと出番を頂戴ね！！でわでわ！！」

満足げに笑う彼女の意識が消えて変化も解けると共に俺の意識も浮上する。

「さて、と」

首をぐるりと廻して確認したうえで、小さく溜息を吐いた。俺の視線の先にあるのは、未だに意識を失っていたマーガレットの姿だった。

「カカツ仕方ねえ。連れて行きますよ、姫さん」

彼女の脇と膝に腕を通して持ち上げた。

出来るだけはだけた彼女の姿を見ないようにしながら、俺も屋敷へと向かう。

「軽いな……」

重さがないのかと思ってしまう。どれだけ強かろうと彼女も女性で、そして仮初。

「なんとかしてやりてえな——」

そんな呟きは聴こえることなく消えていった。抱えられたマーガレットの寝顔はとても可愛らしかったとだけ語っておこう。

……

……

マーガレットをエリザベスに預け居間でのんびりしていたところで、神様が姿を現した。一瞬だけ空間が歪み、ソレが収まったと同時に現われるのだから心臓に悪い。

「そろそろ旅立ちの時ですが」

別れとはあまりにもあっけないものだな。

「そうか」とだけ俺は応え、彼女に俺の前にあるソファを勧めた。彼女は静かに腰を下ろすと何も言わずに、ただ俺の言葉を待っていた。

「コーヒーをお持ちしました」

軽いノックと共に、二人の姉妹が二つのカップをのせたカートを乗

せて現われると静かに頭を下げてテーブルに置いた。そのまま、俺の後ろに二人は移動すると静かに時を待っていた。彼女達は受け入れていた。今日、この一瞬が終われば自分達が消え去ることを。けれど、けれど、それが俺は許せない。

「頼みたいことが一つある」

ああ氣に入らねえ。

こんな風に現実を見つめるこいつらも、こんな現実気付いていなかった俺自身が氣に入らねえ。

「聞きましょう。最後の別れですから。私に出来る範囲ではありますが」

彼女はやはり俺の言葉を待っている。

「こいつらを連れて行きたい」

俺の後ろががたりと揺れた。俺は二人の動揺を無視して言葉を続ける。

「こいつらに世界を見せてやりてえ。」

空の青も――

大地の緑も――

海の色も――

風の流れる感触も――

花の香りも――

昼間の暖かな太陽も――

夜の静かな闇も――

こいつらは知らずに終わるのか？そんなモン俺が認めねえ」

ゲームの中でもこいつらはベルベットルームで来客を待ち続ける存在だった。せつかくの新しい人生だ。こんなところで終わりを告げて良い訳がない。

目の前の神様は俺の言葉をひとしきり聞いた上で目を細め、口元を右手で隠してケラケラ笑った。

「本当に、本当に貴方は面白い方ですが――
それは私一人に言えば叶うものではないです」

二人はそれを望んでいるのですか？と彼女は言った。
その言葉に俺は静かに席を立てて彼女達の前へと移動する。彼女達は真っ直ぐ俺の方に視線を向けるが、その瞳は揺れ動いていた。

「クカカツ俺は強欲だ。だから、一度しか言わねえ――」

――俺と来い。俺が世界を見せてやる！！

彼女達はその言葉に一瞬キョトンとして、そして嬉しそうに笑みを浮かべた。その瞳から流れ落ちる雫は、美しかった。

「では、契約と参りましょう——」

いまだソファーに腰を下ろしていた神様は顔をにやりと歪ませた。
途端——俺と二人を囲うように魔法陣が浮かび上がる。あの時と同じ、『仮契約』の魔方陣だった。

「てめえ——何を」

「彼女達は望んでいます」

一瞬顔を神様のほうに向けて非難しようとしたが、その言葉に彼女達の方を見れば、二人は静かに目を閉じ両手を胸の前で結んで何かを待っていた。

俺はそれを見て溜息を一つ。その上で、エリザベスとマーガレットの腰を両腕で抱き寄せた。

目の前に映る二つの顔。

「良いんだな？」

「私はいつも主の下に——」

「連れて行ってください、主」

目を閉じている二人にそつと唇を落とした。契約はここに完遂された。魔法陣から溢れた魔力が頬を撫でると輝きを増し、神様の手には二枚のカードが収まった。

「こちらがマスターカードになります。貴方に渡しておきましょう。コピーカードはお二人に」

カードが四枚に増え、それを手渡してきたので受け取るとコピーカードをそれぞれに手渡した。それを受け取った二人はしげしげとそれを眺め、二人で見せ合ったりと忙しい。確認は後でいいだろう。

カードをズボンのポケットに収め、再び席に戻った。

「それでは最後に伝えておかねばならないことがあります」

シンと部屋の中が静まり返った。威圧感というか存在感というかそんなものが辺りを包み込んだ。

「おめでとうございます。貴方は神となりましたが」

静寂に包まれ、緊張していた俺はあっけないほどに告げられた言葉に口をあぐりさせた。パチパチと手を叩く音はあまりにも軽すぎる。

「は？」

「正確には現人神あらひとがみというのが正確ですが。最初に彼女達と戦った際の神々との完全な契約によって貴方の存在は神へと押し上げられました。最初に言っただけですが。『肉体は精神たましいに引き寄せられる』と——半人半神のような中途半端な形ではなく十割人間、十割神といったところですね。貴方が新たな世界として死んだ後は確実に神として祀り上げられることでしょう。」

ですが、そのせいで貴方の寿命は人間のそれと比べて五倍程度に延びました。五年で一歳歳を取ればいいほうかもしれません。しかも老化は最盛期で確実に止まります。貴方が死んだ後、適正な手段に

則って神として転生させますのでそのつもりで」

精神は一気に冷え固まり、まともな思考が出来ない。しかし、気付けば俺は笑っていた。

「クカカカッ良いじゃねえか。現人神だろうが人外だろうが俺は俺だ。俺は俺らしく俺らしく死ぬ。今もそれに変わりにはねえ」

紡がれた言葉は紛れもなく俺の本心だった。その返答に満足してか彼女は何度も頷くと、彼女の左後ろの方を手の平で指した。すると、そこに音もなく新たに扉が現れた。

「あの扉を開いた先が、新たな世界ですが。私にとっては短い時間ですが、とても楽しく充足した時間でした。新たな人生をどうぞお楽しみください」

これ以上の問答は不要だった。俺は立ち上がりゆつくりと扉の方に向かう。目の前にそびえる扉の取っ手に手をかけ後ろを振り返る。俺のすぐ後ろに佇むマーガレットとエリザベスの間から未だにソファーに座ってこちらを見ようとしなない彼女の姿が映る。

「名を——アンタの名前を覚えてくれないか？」

「人界では——『聖母』の名で通っています」

「クカツそうかい。縁があつたらまた会おうぜ、マリアさんよ」

俺は取っ手を握る手に力を込め、押し開ける。扉の隙間から漏れる光の奔流が目を焼き、俺の意識はそのまま飲まれていった。

「お氣をつけて」

そんな言葉が彼女との別れとなった。

別れるときは涙雨（後書き）

正直なところですが、エリザベスとマーガレットを連れて行く流れですが書いている寸前までは思いついていませんでした。手が勝手に動いたとしか表現できない状況です。まあ、そういった勢いで書いてるほうが作者的には楽しいのでいいんですがwww

さて導入というか修行編が終わり、いよいよ次回から大戦編へと突入します。作者個人としては早くマホラ編にいきたい所です。マホラ編に関してはいろいろ考えているのでお楽しみに。

んで未だに主人公の名前が出ていない状況ですが、ここまで話を書いていたところで、まだ名前を決めていない現実に気付きました。ま、いいか。

大丈夫だ、問題ない。

とりあえず今から名前を考えておきます。

生まれる痛み（前書き）

久々に更新させていただきました。けっこう勢いで書いたもので、あとで修正掛けるかもしれません。

生まれる痛み

誰かの声が聞こえた。

「——き、——くだ——、あ——」

身体感覚は全くといっていいほどなかった。目も開けられず、まるで生まれたばかりの子供のようなまどろみが俺の身体を包んでいた。

「起き——ください、主！」

段々と意識がはっきりしてくるにつれて声ははっきりと耳に伝わってくる。しかし、水の中で音を聞いているかのようなフィルターの掛かったような感じでしか音が聞き取れなかった。

「起きてください、主——！」

ようやく聞き取れた声がマーガレットのものだと気付いて俺ははつと目を見開いた。しかし、俺の目の前に飛び込んできたものは緑色に染まる視界だった。

「もがッ！？ガバッご、ぼっっ」

驚きに開いた口内に液体が這入りこみ、呼吸が荒れて溺れる。しかも、鼻の中にチューブが繋がっているらしく、それが更に俺を焦らせる。いわゆるパニックというヤツだ。

「落ちていてください——！もうすぐ液体が排出されるはずです」

聴こえてくる言葉はなんとか理解できる。しかしだ、この状況で落ち着けなんてふざけるな、と言いたい。

「強制排出——」

少し離れた場所でモニターを見ていたエリザベスがキーボードを操作していた。甲高い警告音と共に俺を包んでいた液体を

収めたカプセルのガラス部分が少しずつ開き、液体を輩出しだした。同時に浮力で浮かんでいた俺の身体が液体の流れに乗ってそのまま地面に投げ出された。とつさに鼻に刺さっていたチューブを抜いて、地面に落ちる前に受身を取る。ベチャツと落ちて、軽く衝撃が身体に響いたが、そこまでの痛みはない。そのまま立ち上がるうとしたところではたと気付いた。

「全裸マッパかよ——」

さっきまで余裕がなくて気付かなかったが、服の類を一切身に着けていなかった。彼女達はそんな俺の姿を見てもなんとも思わなかったらしい。

「ゴホツとりあえず、ふくねえのか？」

むせながらも尋ねる。ああ、空気がうめえ……

「こちらを——」

そう言って近づいてきたマーガレットの手には服とタオルが載せられていた。なんとか身体を起こしてそれを受け取る。いまいち身体

の動きが鈍い。どうやらそれなりの時間このカプセルの中にいたらしい。自分の感覚では扉を通った直後のことなので実感はないが、ぎこちない動きで身体を拭いて服を着ていく。

「なあ」

「なんでしょう」

「流石にそんなに凝視されるとはずいんだがよお」

こちらから目を離さない二人にそう言った。二人とも無表情だが、それなりに長く一緒にいたせい、それなりに表情が読み取れる。特にエリザベスなんかは喰い入るような目付で俺の身体を観察している。

「身体の不具合を心配しているだけですでお気になさらずに」

「いや、だからな？」

「お気になさらずに」

「ハイ」

あれだ、無表情の圧力というヤツだ。諦めて素直に服を着る。七分丈のジーンズに無地の黒Tシャツに袖を通す。サイズは問題ないが身体の筋肉のせいでTシャツが少しぴっちりしている。まあ気にならない程度だ。

「ふう——んで、ここはどこだよ？」

ようやく落ち着いたので今の状況を確認する。

「ここは魔法世界にあるとある研究所です。更に付け加えるなら、今は原作前の大戦期です」

「魔法世界なのはまあいい。むしろ俺みたいな存在が簡単に生まれるのはマズイからな……」

カカツそれにしても『大戦期』かよ。こりゃー巻き込まれんのは確実か」

笑みを浮かべてみたものの内心としては頭を抱え込みたい気持ちだった。

と言うのも、俺という存在はかなり異端だからだ。神降ろしに特化してしまったが上の弊害と言うべきか、魔法への適正がゼロに等しい。もつと詳しく説明すれば、神霊を自分の身に憑依させるという技能は俺を完全にそれ専用へと造り変えた。結果的に本来あったはずの一般的な適正は喰い尽くされ、召喚魔法に関してのみ適正を残した。それが神を降ろすまでの適正として存在している。これに関しては裏技があるのでそこまで気にしていないが、問題は俺自身が『現人神』であることだ。

神を降ろす神——聴こえは良いが、デメリットも大きい。

神が神として力を発揮させるには信仰がいる。信仰のない神は力をなくし、最終的には消滅する。逆に信仰が強ければ、本来以上の力を発揮できる。俺自身、半分は人間という括りなので極端な増減はないはずだ。

しかし、心のどこかで信仰を求める神の部分も存在するのだった。

「とりあえず、外に出るか……」

しばらく今後について考えてみたが、そういった結論に達した。開き直りかもしれないが、このままじっとしていれば良い訳ではないし、俺の性にも合わない。

「その前にこちらを——」

今まで無言で俺達のやり取りを見ていたエリザベスが、そう言っ手渡してきたのは二通の便箋だった。一つは何の変哲もない普通の手紙だった。

けれど、もう一つは薄汚れていた。表面の半分が赤黒く染まっいて、既に乾いている。見た瞬間に分かる、それは血の痕だと。

「これは——」

受け取ってまじまじと調べてみるが、名前もなければ特徴もほとんどない。何より俺達はいさっきこの世界に来たばかりだ。知り合いないっているわけがない。

「一つは『聖母』からのお手紙でございます。そして、もう一つは

——」

答えたエリザベスはそこで言葉を切った。彼女は躊躇いがちに俯いた。俺に聞かせるべきかどうかと。

「もう一つは？」

俺は静かに先を促す。

「もう一つはこの研究所の持ち主だった男からの『遺言』でございます」

その言葉の意味を理解するのにしばらくの時間が必要だった。

考えてみれば分かることだ。俺達三人が突然現われてしまうのはおかしい。

俺達の存在は本来の物語からは外れたモノだ。世界という物語に異物を入れ込むには土台がいる。俺達三人が生まれる土台が。

けれど、けれどだ。それは許されることだろうか？

「つまり、アレか？

俺達三人を生み出すためにこの世界（物語）の住人が一人死んだって事か？」

責めるようになってしまった自分の口調。怒りを無理矢理押さえ込むが、言葉の端々から怒気が漏れ出し、魔力の奔流によって俺の周りの空間が蜃気楼のように歪む。

自分自身すら息苦しくなるほどの魔力のうねりを直接感じている二人の頬には極度の緊張によって一筋の汗が滴っていた。

けれど、彼女達はじっと俺のことを見つめていた。

「お読みください——

その中身には、とある男の苦悩の果ての決意が刻まれております」

しばしの沈黙が流れた。

「——ああ、分かった。見てやるさ。これが俺の罪だというのなら、俺はこれを見なきゃならねえ」

封筒の端をビリビリと裂いて、中身を取り出す。封筒は血に汚れていたが、中身の手紙に関しては何も汚れが見当たらない。もしかしたら魔法によって保護されていたのかもしれない。確か、魔法使いの使う手紙は立体映像のついたビデオレターのようなものだったはずだ。

そんなことを考えながら折りたたまれた便箋を開いてみたが、何の変哲もない便箋。補助用の罫線の引かれた二枚の紙だった。そこには見たことのない文字が所狭しと羅列されていた。アルファベットに近いような気もするが、あくまで『似ている』レベルだった。

そんな見たことのない文字だったが、不思議と内容が理解できた。

最愛の息子へ——そんな冒頭から手紙は始まっていた。

最愛の息子へ——

この手紙が君の手元にあるということは、君が問題なく稼動しているということだろう。そして、私はこの世に存在していない——そういうことだろう。

私は、とある研究を行っていた科学者だった。人工生命——正確には魔力生命の研究を中心に行っていた。研究を行っていたある日、とある組織から勧誘を受けた。資金も足りず行き詰っていた私は、それを好機として飛びついた。

彼らは『「スモエン」完全なる世界』と名乗る、世界を救うことを目的とした組「テレケイア」

織。

けれど、私はあくまでも学者だ。世界の破滅になど興味はない。ただ、自分の求める完全な生命を作るためにのみ注心した。彼等からの依頼はそれぞれの属性に特化した魔法生物を生み出すことだった。

研究を積み重ねて、なんとか成果として一体の人形を造り上げた。けれど彼等の目的において、その価値というのは『兵器』としてしかなかった。

私は苦悩した。私が作り上げたかったのは『兵器』などではない。私は、弱者を守るために、自分にとって大切な誰かを守る力を持った『人間^{ナニカ}』を造りたかった。

苦悩の末に、私は逃げてしまった。

逃げて、逃げて、逃げて、逃げきった私に待っていたのは、私が作り上げた基礎を元に彼等が生み出した『兵器^{アーウエンクルスシリーズ}』が、今の帝国と連合との戦争を裏で操っているという現実（地獄）だった。贖罪のつもりだったのかもしれない。

彼らが正しく人間として生きていけるようにと願いを込めて君と――君の傍に仕えているはずの二人を造った。

けれど、カプセルの中に浮かぶ君を毎日心配そうに、それでいて待ち望んでいるかのように見つめている二人の姿を見ているうちに気付いたよ。そんなモノはまったく関係ないってね。

君も、彼女達も、そしてこの世界にいる全ての生物が、自分の思いのままに生きている。

だから、君も自分のやりたいように生きて欲しい。私もそうやって君を作ったんだから。

君の人生は今から始まる。私から言えるのは、ただ、楽しんでくれ。それだけだ。もしも、君がアーウェルンクスたちに出会うことがあれば訊いて欲しい。

『君達は幸せか——？』

最後になるが、君の武装として君の属性を切り替える召喚器を用意している。二人から受け取ってくれたまえ。

君が正しく人間になれることを祈って——

アインス・ペイン

文字はそこで終わっていた。

「彼はそれを書いた3日後に亡くなりました」

彼は幸せだったのだろうか。そんな疑問だけが頭を支配する。

けれど——

「カカツそんな疑問は彼に対する侮辱、にしかならんな」

読み終わった手紙をたたみ、2通目である女神からの手紙に目を通した。

書いてあることは2つだけ。

俺の寿命についてと、手紙の主は、きちんと天に召されたことだけだった。

最後に、『貴方の思うがままに——』そんな願いが添えられていた。クシャリと手紙を握り締め、顔を上げる。

「彼の墓は、施設外の丘の上に——」

マーガレットの言葉に頷いた。俺の心を読んだかのような一言。

「出るぞ——マーガレット、エリザベス。俺は俺になりに行く。付いて来い」

「「かしこまりました」」

二人の先導で外に出ると、そこは本当に自分が新たな世界に来ていることを実感させる景色だった。

壮観。そんな言葉では言い表せないぐらいに、広く、大きく広がる大草原。その少し先の小さな丘の上に木片で作られた十字架がチラリと見えた。

そこに向かって一歩一歩歩んでいく。後ろに控える彼女達は何も言わない。ただ、真っ直ぐ俺を見ていることは気配で分かった。

そして、目の前に映る山になった土の上に刺さった十字架の前にしやがみこむ。

「アインスさんよ、アンタがどんな気持ちで俺を作ってくれたかは分からねえ。

——けれど、俺は生きてやるさ。誰のためでもなく、俺自身のために。」

戦争なんて関係ない。俺はコイツ等と、そして俺にとって大事なヤツ等を守っていくさ。

だから、アンタの名前を貰っていく。

俺はこれから『七夜・アインス・織上^{おりがみ}』だ」

小さくそう呟いて立ち上がる。そのまま振り返ると、さっきまで自分達がいた研究所の建物が見えた。

「召喚器を——」

そつと俺に差し出してくる銀色の拳銃を受け取って慣れた手つきでくるりと回転させながらこめかみに銃口を当てる。

「送り火としては派手だがよ。アソコにある情報は無くなってしまったほうがいいだろうよ——」

軽い反発感を指先に感じながら引き金を引いた。

「ラグナロク——」

轟音を響かせて燃え盛る建物に一瞥してそのまま地平に向かって歩き出す。

「それにしても『アインス（始まりの）・ペイン（痛み）』——つてのはなかなかシャレが効いてるじゃねえか」

痛みを胸に俺達は歩き続けた。

生まれる痛み（後書き）

ISのほうを更新してから約1カ月、ようやく俺生活もましになってきました。まあ、未だに松葉杖のお世話にはなっておりますが……

今から少しずつリハビリも兼ねて更新速度を上げていきますので、よろしく願いします。

今回で一応物語としての導入部が終了して大戦期へと突入しますが、今の予定としては、かなり流し気味に行く予定です。早く原作に突入したいなあなんて考えています。

これからも稚拙な文章ではありますが、皆様に楽しんでいただけるように努力しますので、よろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6117q/>

晴れのち転生

2011年10月4日05時48分発行